

シンポジウム

2021 年度シンポジウム司会報告

司会 小村 優太

2021 年度のシンポジウムは「翻訳としての中世哲学」を議題とし、とりわけ今回はオルガノンにまつわる問題を中心に取り扱い、三名の提題者がそれぞれ後期古代、初期中世、盛期中世における論理学の伝播と、それに関連して生じた哲学的問題が取り上げられた。それと併せて、連動報告においてはギリシアの倫理学がラテン哲学者においてどのように読まれたかという問題が取り上げられ、中世哲学における翻訳という問題を異なる視点から切り取った。三名の提題者はそれぞれ、後期古代＝ギリシア語の資料が直接参照できた時代、初期中世＝一部の限られたラテン語訳しか利用できない、翻訳不在の時代、盛期中世＝翻訳運動が盛んになり、ギリシアやアラビア地域からの資料を手にとることができた時代を取り扱い、中世哲学において翻訳が担った役割を異なる視点から分析した。

近藤智彦氏による連動報告「ポエティウスとアベラルーにおけるヘレニズム倫理学」では、ポエティウス『哲学の慰め』と、アベラルー『哲学者、ユダヤ教徒、キリスト教徒の対話』を題材として、古代哲学、主にストア派がどのように読まれていたか検討された。ポエティウスはストア派の唯物論的・経験主義的な認識論を否定し、プラトンのな上昇を擁護する一方で、幸福や善にかんしてはストア派とプラトン主義を融合させたような見解を採る。この「ストア派＝プラトン主義的見解」は神の摂理と矛盾し、哲学の限界を指し示しているという Marenbon の解釈にたいして、近藤氏は、相反する善悪観の併存は古代の文学的伝統に見いだされる方法論である点、『慰め』の摂理論においても世俗的な善悪観をそのまま導入することは避けられている点から反論する。一方で、有徳な人間が、有徳であるということの故に現世においてすでに最高度に幸福であるならば、神の摂理や死後の賞罰は不要になるのではないかという問題が提示される。

ポエティウスが擬人化された〈哲学〉と対話したように、アベラールも『対話』において〈哲学者〉と対話する。この〈哲学者〉はイスラーム圏の哲学者がイメージされているとのことであるが、アベラール自身はアラビア語からラテン語への翻訳活動が活発になる直前に活動した人物であり、直接的にイスラーム圏の哲学書を読むことはできなかった。また、〈哲学者〉の実際の主張はストア派に近いものとなっているが、それはアベラールがプラトン主義をキリスト教の真理の一部に到達していたものと見なしていたからという点が指摘される。アベラールが描き出す〈哲学者〉は議論のなかで立場を修正してゆく点に、近藤氏はケケロからの影響を見出す。アベラールの〈哲学者〉が見出した最終的な立場は、この世ではなく来世での幸福を追求するという態度であった。

西村洋平氏による提題「哲学入門と翻訳——ポエティウスの『エイサゴーゲー』訳注をめぐる」では、ポエティウスがギリシア哲学から中世哲学へのたんなる「ダクト・パイプ」に過ぎなかったのか、それともポエティウス自身にもオリジナリティが存在したのかという問題が、『エイサゴーゲー』の訳注を題材として検討された。ポエティウスは『エイサゴーゲー』への最初の注釈においてマリウス・ウクトリヌス訳を使用したか、自らの訳を使用したふたつ目の注釈においては、ボルピュリオスの原文に忠実に翻訳しようと試みている。また一方で、たんに字面だけの翻訳に留まらない、より踏み込んだ翻訳もおこなっている。ポエティウスは類種の存在にかんする箇所では、ふたつ目の注釈ではその非物体性を受け入れ、むしろその非物体の身分を問題とする。彼は類種をたんに思考のみによって存在するという説を批判し、類種が感覚される物体のうち存在する限りでは物体に依存するが、思惟されるものとしては、自体的、離存的に存在すると多層的に理解する。ポエティウスにはプラトン主義的なバイアスがある一方で、ふたつ目の注釈においては入門書という性格を重視し、アリストテレスにも従っており、そのためにポエティウスのバイアスが見えにくくなっているという。西村氏は、ポエティウスによる論理学作品の訳注は単なる翻訳ではなく、プラトン主義や神学に通ずる筋道をつけていたと指摘する。

永嶋哲也氏による提題「『デ・アニマ』前の認識理論——アベラールは *imaginatio* をどう説明したか」では、アリストテレスの『魂について』を実際に読むことができなかったアベラールが、わずかな論理学著作とその注釈をもとに、どのように *imaginatio* を理解したか検討された。アベラール

ルは『命題論註解』、『イサゴージェ註解』、『理解について』などの作品において、先行するボエティウスの注釈などに基づいて、可能な限りアリストテレスに接近しようとしていた。しかしそこでアベラルーが描き出す表象は、永嶋氏が指摘するように、アリストテレスのファンタシアー解釈史における、典型的な解釈パターンから外れた独自のものであった。アベラルーはラテン語へのアリストテレス翻訳が本格化する直前の時代に活動していたため、彼の解釈は、『魂について』を直接読んで書かれた注釈とは異なり、また後世の解釈に与えた影響もほとんどないとのことであるが、「翻訳の不在」における DIY 精神をきわめて良く体現していると言えるのではないか。

古館恵介氏による提題「『命題論』註解と動詞論の変遷——プラトンからオッカムまで」では、プラトンからオッカムに至るまで、動詞という概念が論理学においてもつ役割の変遷が通史的に取り扱われた。アリストテレスが『命題論』においておこなった動詞の定義が後世の哲学者たちの解釈の基本形となったが、まずはボエティウスの翻訳、注釈が以降のラテン語圏の解釈に一定の方向性を与えたという。一方で 13 世紀になるとトマスは、アンモニオスの注釈を利用することにより、ボエティウス＝アベラルーとは別の解釈を導入する。その後オッカムに至り、命題における動詞の固有性は論じられなくなってゆくが、これはオッカムが『命題論』ではなく、新たに利用可能になった資料『分析論前書』に依拠していたからではないかと古館氏は指摘する。

本シンポジウムはコロナ禍ということもあり、Zoom のウェビナー上で開催され、提題者の発表も、それにたいするフロアからの質問もすべてオンライン上でおこなわれた。ウェビナーには多数の質問が書き込まれ、盛況のうちにシンポジウムを終えることができた。